

Title	日英交通史の研究(武藤長藏著, 内外出版印刷株式會社發行)
Sub Title	
Author	會田, 倉吉(Aida, Kurakichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.3 (1937. 11) ,p.166(494)- 168(496)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0168">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19371100-0168</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

に幕末に於けるマニユファクチュアの問題を論ぜられたもの、之亦、服部之總氏が「日本資本主義發達史講座」中の「明治維新の革命及び反革命」に於て氏の舊著「明治維新史」に於ける、明治維新を以て世界市場形成過程の一環とする見解に對し、外國資本の過重評價なりと自己批判し、幕末を以て「嚴格なる意味に於けるマニユファクチュア時代」と名附くべしとする新説提唱に對し、土屋氏が之を不十分なる資料に基く速断なりとした嚴マニユ時代説尙早論に端を發した所の所謂マニユファクチュア論争中の諸論文を集められたものである。併し乍ら、それらは該論争中の所産なりとは云へ、その内容は氏の十年一日の如きたゆまざる根本史料に即した努力研究の結晶であつて、論争より離れてなほ、日本經濟史研究上劃期的勞作と稱さるべきである。

なほ、附録として收められた大島、吉川兩氏の二研究は未發表なりしとは云へ、既に諸論著に引用せられてその學的價值を認められ來つたもの、特に大島氏のそれは桐生地方のマニユ發達を研究されて、既に羽仁五郎氏により前掲講座中にも紹介せられ、服部氏の新説提唱の根據となつたとさへ専ら風評さるゝもの、土屋氏の論敵服部之總氏が既にその論争關係諸論文を「明治維新史研究」(後に「維新史の方法論」と改題)として纏められたのに對し、土屋氏が漸く本書に於て論争關係諸論文を一括上梓されたことと共に、むしろ、その發表の遅かりしをかこつべきであらう。

明治維新研究者のみならず、苟も日本資本主義の本質に學問的興味を有するものにとつて大なる關心をもたしめた右論争も今や華々しき論戰の砲火を收めて、再び根本史料に基く實證的研究の

塹壕戦に入つたかの觀がある。今や時を得て本書によつて右論争の一應の清算が遂げられたことは、吾人をして更に聽て來るべき新なる百花繚亂たる學的成果への待望に心躍らしめて餘りありと云ふべきである。(本文三七〇頁 二圓八〇錢)(高橋碩一)

### 日英交通史の研究

(武藤長藏著  
内外出版印刷株式會社發行)

著者武藤氏が當問題——日英交通史に關して從來發表せられたところは決して尠くない。先づ昭和四年十一月大阪朝日新聞社の發行せる「開國文化」には「日英交通史概観」(三九五—四七七頁)と題する一篇が收められ、その後昭和八年十一月には改造社發行の經濟學全集第二十八卷「世界經濟史」中に「日英交通史」(三一七—四一一頁)なる篇の採録せられたこともあつた。前者は則ちその年の春同新聞社が創立五十年を記念するための企てのひとして開催した開國文化大講演會に於ける講演を基として成り、後者は則ち之を改訂削除したものである。而して此の他、更に河津暹博士の還曆祝賀記念論文集たる「經濟學の諸問題」中には「初期日英交通史の重要文獻」(六八七—六六頁)なる一篇が存するし、殊には長崎商業學校研究館年報「商業と經濟」にこれまで屢々掲載せられて來た「日英交通史料」の如き、著者が當問題に關して如何に傾倒し盡されて居るかを最もよく示すに足るものであらう。それは昭和三年十一月同誌の御大典記念號に第一回を發表してより以來正に九年、その數も既に十六回を重ねて、茲に擧げられた史料が二九五頁に三百の多きに及ばんとして居るので

ある。而もその最も力を注がれたる部分の一として、レタイン號事件や、フートン號事件に關する數多の文獻の紹介、及びそこに複製せられたる幾多の貴重史料等には特に多大の價値を有するものと云ふべきであらう。曾つて或る講演會に於いて親しく著者と接したる際に、筆者もその別刷數冊を惠贈せられたことがあつた。猶ほ又、昨年六月には英文にて A Short History of Anglo-Japanese Relations, Tokyo, 1936. と題する四六版約八〇頁程の小冊子が公刊せられて居る。

斯くして當問題に關する著者の以上の如き研究の成果を云はゞ總決算するものとして出で來つたのが本書である。と云ふのは、つまり本書に收むるところの大部分が如上の諸論文を少しく改訂したり、或は削除したりしたものに過ぎないからである。則ち今その目次の大項を見るならば、第一篇が「日英交通史概観」であつて之は先に記せる「開國文化」及び「世界經濟史」所收のものを基として成つて居り、第二篇「日英交通史料」は「商業と經濟」所收のものを殆んどその紙型のまゝに矢張り十六節に別つて収録したものである。又第三編「初期日英交通史の重要文獻」とは初期の日英交通史上にあつて最も重要な役割を果したウィリアム・アダムス、ジョン・セーリス、リチャード・コックスの三人に關する文獻に検討を加へたもので、之亦云ふまでもなく先述の河津博士還曆祝賀記念の論文集所收のものに他ならない。次に第四編と第五編とは「舊（倫敦）東印度會社と我國との交通貿易」及びその再論の（一）（二）であつて、傍題にも「ジョン・ブルース著東印度會社年代記」とある通り、舊式ではあるが秩序整然たる長所を

備ふるものとして著者に認められて居るブルースの著述を中心に記述せるもので、之に關しては著者自ら特に「私がこのブルース氏の舊き著書を我學界に紹介したのは我國に於て未だ何人も之を利用した學者が無いからであつた云々。」と述べて居る。

従つて以上の如き具合であれば、本書に收むるところは必ずしも著者の最近になされたる勞作とのみは云ひ難い。その上強ひて指摘するならば、本書はもとより著者のこれまでの研究を大成したものでこそあれ、別に一貫した著作と云ふわけではないから、そこに多少不整備の感を懷かせるものがないでもない。が併し斯うして過去の著作を一冊にまとめられることは讀者にとつて如何にも便利なことであり、又然うした過去に於ける著者の甚大なる業績に對する敬服の念を再び新たに於ける機會をも得て、本書の意義が茲にも決して尠くないことを深く知るのである。而も本書にあつては、假令それが既に發表せられたものの再録に過ぎぬとは云へ、著者の絶えざる努力によつて常に改訂に改訂の加へられつゝあることが充分に窺はれ、その二十一頁にわたる長い自序には本書の出版までに間に合はざりし二三の史料について記されて居るのみならず、更に所收の誌編殊に日英交通史料の如き他日重ねて稿を改めたき旨が述べられ、或は再び渡英して India Office, Public Record Office 及び British Museum 等に史料を採訪したきものとの希望を洩らして、當問題に關する著者の益々強き研究心を物語つて居る。茲に於いて筆者は、その寧ろうるさきと思ふまでに多岐にわたつて蒐集せられた豊富なる史料又はそれに基づき論述を改めて披見しつゝ、今更の如くに著者のこれまでの

多大なる盡力に對して深く敬意を表すると共に、進んでは斯くの如き著者の終始たゆまざる努力が一層輝かしく結實するの目を衷心より祈らずには居られない。(菊判本文七六七頁圖版三十六葉)(會田倉吉)

### Historical Bibliographies (A System-

atic and Annotated Guide) by E. M.

Coulter and M. Gerstenfeld, 1935

史學の範圍が益々擴大し諸部門の研究が愈々細分するに至つて夥しく出版される史書の選擇は初學者はもちろん、専門家にとつても容易な業でなくなつて來た。隨つて之に對する指針を與へんとする編著も相當に出版されてゐる。中にも O. V. Langlois,

Manuel de bibliographie historique の如きは最も好評を博したものであるけれども一八九六年の初版ではもう今日の用を便しない。米國史學協會の書目編纂委員會が同國の圖書館協會と協力して編纂した A Guide to Historical Literature, edited by W.

H. Allison, S. B. Fay, A. H. Shearer and H. R. Shipman 1931の如きは最近に於ける最良著であつてこの程廉價版を出し大に便益を與へてゐるが、一般史を重んじ特殊問題に於て所々閑却せられた傾向がある。International Bibliography of Historical Science は年々刊行せられてゐるけれども初學者にとり便利であるとは言へない。その他の諸著何れも一長一短を有し一般向きなものが少ない。そこで使用上の便利といふ點に重きを置いて本書

が企てられ、一九二七年に刊行せられて好評を博した同名の書物はカリフォルニア大學圖書館學校の教授で又傑れた司書官であるクルター氏の著述であつたが、それにヨーロッパの大學で斯學に研鑽を積んだガーステンフェルド氏が參加してこの新著が生れたのである。繁簡宜しきを得たる本書は七百七十五種の書物を分類して簡明なる解題を附してある。勿論米國の學生を直指して編纂せられたものであるけれども、西洋史に關するこの方面に良著なき我が國の學生にとつても手頃な良著である。(間崎万里)

### The British Empire

By a Study Group of Members of The Royal

Institute of International Affairs, 1937.

大英帝國植民地は大體自治領 (Self-Governing Dominions) と直轄植民地に別たれ、しかもその中間に位するものもあつて、全世界に散布せる是等植民地は、併合、占領その他種々の方法を以て獲得せられた關係上、それ々々個々別々の沿革、統治關係を有し、頗る複雑である。それに大戰中に於けるその發展と活動は俄然勢力を増加し、自治領それ々々が『ネーション』を形成し、戦後國際聯盟に獨立の單位として多くはその代表者を送り、英本國に對しても對等の地位を獲得するに至つたのである(一九三一年のウェストミンスター法)。本書は是等植民地の總括的研究を試み、第一篇に於て各邦の過去及び現狀を個別的に記述し、第二篇に於てその全組織、法的關係、第三篇に於て英帝國と對外關係、